ルル 追加 HO A ツバメと階段前で別れた私は、調薬室へ向かった。

ポケットから鍵を取り出して扉を開ける。

内鍵をしっかりと閉めて、薬草の匂いが満ちている部屋で伸びをした。

一気に力を抜くと、自分が緊張していたことに気づく。

まさか男性が来るとは思わなかった。

住み込みになる可能性が高かったため、庭師要請の手紙には女性希望と書いていたのに。

要望は通らなかったようだ、仕方ない。

新しい庭師――ツバメは、人当たりがよさそうな印象だったけれど、 笑顔の奥が見えないような――そんな感覚になった。

しかし、植物に見せていた笑顔はあたたかく、優しくて。

初対面だけでは彼がどんな人なのか、わからなかった。

植物が好きということだけは伝わってきたから、仕事はきっと大丈夫だろう。

まだ信じることはできないけれど、どうか、彼と良い関係が築けますように……そんなことを考えながら、私は魔法の植木鉢をのぞいた。

植木鉢は布で隠されたところに置かれている。

日に当てずとも育つと聞いているけれど、芽が出る気配すらない。 父の記録によれば、芽が出たあとすくすくと育ち、すぐ花が咲く。 その花は一日しか持たないから、すぐに薬にしないといけないらし い。

だから観察を怠ってはいけない。

目隠しの布を戻すとき、近くに置かれていた万能薬に目がいった。 残りは、二本。

これをいつ、誰に使うのか……。

父とともに抱えていくはずだった責務は今、全て自分の肩にのしか かっている。 それを苦しい――だなんて。 首を振った。

いけない、こんなことでは、リーファの薬師は務まらない。 気を取り直して、診療記録に手を伸ばした。 明日から診察がはじまる。

『診療記録

フォル・モリンズ (五歳・男児)。生まれつきの体質虚弱。原因不明の発熱を繰り返しており、定期的に解熱薬を処方中。

ロッソ・バリー(七十八歳・女性)。三年前に転倒し、左下肢に痛 みが残る。鎮痛作用のある塗り薬を処方中。

• • •]

両親はもういない。
ひとりで患者を診るのは、これが初めて。
がんばらなくちゃ――。
そんな決意のもと、私は記録に目を通していった。

日が暮れはじめたころ、鍵を閉め、キッチンへ向かった。 今日の夕食はグラタン、食用花を散らしたサラダ、湯剥きしたトマトを酢であえたもの。

グラタンが焼きあがるころ、ツバメがキッチンに顔を出したので、ふたりでテーブルについた。

「いただきます」

「どうぞ。口に合えばいいのだけど」 「……うん、おいしい!」 明るくなった表情、グラタンのスプーンを止めない手に、ほっとする。

そして、話題は仕事の話へ移っていく。

薬屋リーファの庭師は、薬草園の管理・維持・採取のほかに、薬の配達が仕事に含まれること。

「毎日薬を飲まなくちゃいけない患者さんとか、診察後に薬が用意 できなかった人への配達ね」

「そうなんだね」

ツバメの眉が、少しだけ、寄せられたような気がした。 でもそれは一瞬で、すぐに笑顔になる。

「がんばるよ」

気のせいかしら。

でも彼はこの町に来たばかりだし、庭師が配達をするということもあまりない。

だから、私は安心させるように言った。

「ええ。小さな町だし、地図もあるからきっと大丈夫よ」

彼はただ、笑顔でうなずくだけだった。